とじこもり傾向の子どもたちのために

とじこもり傾向の子どものいる家庭に相談員が訪問する家庭訪問相談が始まって３年目になります。訪問相談は学校や家庭からの要請を受けて相談員が直接家庭を訪問するものです。訪問はケースにもよりますが週に１回１時間程度です。相談室での面接と違って家庭での面接は家庭の状況や子どもの様子が見えやすく、子どもに合った援助を考えることができます。

子どもとの面接では、不登校のストレスや人に対する不安を和らげ自信を回復できるような場を作ることを心がけています。子どもたちの中にはセンターに定期通所できるようになったり「そだち」に通うようになった子もいます。また担任や先生方の協力で相談室登校を始めたり、部分登校から完全復帰したケースや将来への希望を見い出して学習を始め、高校に進学して学校復帰したケースも少なくありません。

不登校の子どもを抱える保護者は、不登校が長くなり学校が遠くなるにつれて孤立感を感じたり子育てに自信を無くしたりすることが多いのですが、先生以外の人に不安や悩みを訴えることで気持ちが楽になり見通しを持てるようになるようです。また、子どもが相談員と話したり遊んだりする様子に安心し、親もまた余裕をもって子どもに接することができるようになるようです。

訪問相談は家庭だけでなく学校にうかがって担任の先生や相談担当の先生と相談することもあります。情報交換をして学校としてどんな支援ができるかを一緒に考えています。相談員が子どもに付き添って登校したり担任の先生と一緒に家庭訪問したりすることもありました。家庭と学校とのパイプ役として連携がスムーズにいくように心がけています。

とじこもりの不登校がますます増加する傾向にある今、「家庭訪問相談」は援助としてとても有効と考えています。ぜひ教育相談センターにご相談ください。

（佐野）

「そだち」活動紹介

今年度に入り８月までに、「そだち」では３回の体験活動を行いました。

５月　カヌー教室

最初はおそるおそるパドルを漕いでいた子どもたちでしたが、あっという間に上達し、自由自在に乗りこなすようになりました。カヌーに乗れて良かったという声がたくさん聞かれました。

６月　海釣り遠足

心地よい海風の中、楽しく海釣りをすることができました。カニや魚を次々に釣り上げて、子どもたちは大喜び。釣れた時に見せる子どもたちの嬉しそうな表情と大きな声が、大変印象的でした。

８月　バーベキュー遠足

夏休み真っ最中で、「そだち」の友達と久しぶりに会うのを楽しみにして来た子もいました。バーベキューに先立っておこなった「イワナつかみ」では、巧みに逃げる元気なイワナに負けないくらい、元気いっぱい水しぶきをあげながら追いかけ回していました。

自然の中でゆったりと行う体験活動で、子どもたちはそれぞれにリラックスして楽しく過ごすことができたようです。

（篠原）

（発行者）金沢市教育相談センター
所　長　　澤　井　　弘
〒920-0852 金沢市此花町２番７号
℡　(224)0874　　Fax　(263)7830
kyouiku_so@city.kanazawa.ishikawa.jp

教育相談センターだより

第139号

写真 ： 京都文教大学教授　滝口俊子先生講演会

平成12年９月29日発行

この夏の研修会より

夏期休業期間中に３講座で延べ８日の教育相談関連の研修会が行われました。どの講座でも、熱心に耳を傾けている受講者の先生方の真摯な姿がとても印象的でした。受講者からは、「新しい発見をすることができた」「小学校・中学校の様子が分かって良かった」等の感想が寄せられました。また、参加型の受講形態についても概ね好評だったようです。

県外からの先生をお迎えした研修のうち、二つの講演から内容の一部をお知らせします。

「なぜ子どもたちは変わったか　～教師・大人としての子供観の再考～」

成田教育相談研究所所長　　向後　正

集団ではトラブルが起こるのは当り前であり、そのトラブルや問題行動は子どもたちからの訴えである。問題行動の意味としては、「救いを求める」「愛情補給を求める」「存在証明」「成長の軌道修正」「親のあり方へのメッセージ」などが考えられる。問題行動の持つ意味を考えた上で、子どもたちが自分の力で自分の成長を切り開いていくことを助けることが大切である。

また、子どもたちがやる気を持つには、①安心できること　②楽しいこと　③認められることが必要である。そのためには、教師は細やかな心配りをし、子どもたちを温かく受けとめ信頼関係をつくることが大切である。

教師はカウンセリングについては素人である。しかし素人である教師が現場でカウンセリングマインドで関わることで多くの子どもが救われる。カウンセリングマインドは技術ではなく姿勢であり、子どもの考え方・感じ方をありのままに受けとめること、教え・与えることに性急にならず、自ら学ぼうとすることを大切にすること、新鮮で柔軟な目で見ること、自尊心を大切にして追い立てないことなどがそのもとになる。

教師は子どもとともに夢を語り合いたいものである。輝いている教師には子どもが集まる。

「学習障害（LD）児の理解と援助」

明治学院大学教授　　下司　昌一

学習障害（ＬＤ）は、文部省の定義によると①全般的な知的発達に遅れはない　②聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち特定なものの習得と使用に著しい困難を示す　③原因として、中枢神経の機能障害があると推定される　となっている。

学習障害児と間違えやすい子どもたちとして、知的障害児・広汎性発達障害（自閉症）児・注意欠陥多動性障害（ＡＤＨＤ）児がいる。

学習障害児は自分の不得手なことへの努力を一方的に強いられると、「自分はできない」「どうせ私なんか駄目なんだ」と自己評価が低くなり、自暴自棄になることがある。そして、集団不適応や場合によっては不登校といったことが起こることもある。

教師はまず、人と同じように努力してもうまくいかない子がいるということを理解し、その子の特徴に合った支援をしていくことが大切である。その子の能力に合った場があれば、充分に力を発揮することができるのである。

特別なニーズを持つ子の教育を考えることは、一人ひとりにあった教育を考えることに他ならないのである。

（鈴木）

適応指導教室「そだち」

担任と「そだち」との連絡会

過日６月２２日（木）に、今年度第１回目の「そだち」連絡会を開催しました。今回は、「そだち」通室児童生徒の担任の先生だけでなく、広く不登校について関心のある先生方にも参加していただきました。主な内容として、“家庭訪問”の場面をロールプレイの演習を通して体験し、不登校児童生徒の内面への理解を深めました。なかなか役割を演じられず困ってしまう先生や閉じこもり気味の子どもになりきっている先生など様々でしたが、それぞれ意味のある時間を過ごしたのではないでしょうか。また、家庭訪問相談員の目から見える＜***訪問のポイント***＞として、次のような内容について研修しました。

①信頼関係を作っていく段階
子どもがほっとできる訪問を心掛ける。
「今日は会えてうれしかった」
「一緒に～できて楽しかった、ありがとう」

②子どもの世界を共有し元気のもとを探す段階
子どもが興味関心を持っていることを話題にして、接点を見つけて一緒に楽しむ。そして自分を表現させるように配慮する。

③主体性を回復して希望と目標を持つ段階
学校やクラスの様子を話して一つ一つ子どもの不安をなくしていく。

＜心掛けたい５つのポイント＞
- 状況にとらわれず、家族への尊敬と感謝の気持ちを忘れない
- 訪問者の満足感を優先することなく、できるだけ相手に表現させる
- 言葉だけでなく、五感を働かせて相手の気持ちを感じ取る
- 秘密保持を原則とし、他に伝える場合には本人の了解を得る
- 一人でがんばらない、チームで取り組む

＜担任への４つのお願い＞

- 家庭への連絡は先生から
- 約束は必ず守る
- “～しかできない”でなく“～ならできる”
- “なにもしない”は“何にもならない”

次回は、１０～１１月の間に各学校と個別に連絡会を設けたいと考えています。（竹内）

学校コンサルテーション

教育相談センターには保護者からの相談のほか、学校の先生方からも様々な相談が寄せられます。

そこで、忙しい先生方の授業の合間や放課後の時間を利用して、こちらから出向いて、学校で先生方からお話を伺いながらともに問題の解決を考えていく相談活動（学校コンサルテーションと名付けています）に力を注いでいます。一学期にはのべ32件の相談がありましたが、そのうちの一例について相談された担任のＹ先生から感想をお寄せいただきました。紹介いたします。

小学校2年生Ａさん：（主訴）教室からとびだし、居場所が分からなくなる

学校コンサルテーションの一番の利点は、学校に居ながら相談ができる事だと思います（相談日時はできる限り学校の予定に合せてもらい、１学期に３回実施できました）。また、保護者の方の承諾を得た上ででしたが、授業中のＡさんの様子も直接見せてもらいました。

この相談の中で私は様々な指導の手がかりを掴むことができました。それは、例えば①一度に沢山の課題を与えない②課題に取り組む時間は最初は短時間（10分程度）を目標にし、徐々にのばす③教室の隅に課題が終わったら休めるスペースを設ける　等々です。

４月当初には頻繁に教室をとびだし、着席している時間の短かったＡさんですが、学期末の７月になり教室からとびだす回数がぐんと減りました（教室から一度もとびださない日が３日間ありました）。プールが大好きなＡさんは、プールに入る日にはベル着をがんばれるようにもなりました。

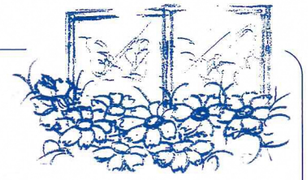
今もＡさんは、毎日学校の廊下等では学年や級外の先生方によく励まされています。そして、沢山の先生方との関わりの中で少しづつ成長してきているように思います。

これからも私は、学校コンサルテーションで掴んだ指導のポイントを大切にしたいと考えています。

＊先ずは電話でお問い合わせ下さい（TEL224-0874）。お待ちしております。（上農）

相談の窓から

相談室から見えること



ここ金沢市教育相談センターには相談室が３部屋あります。その中で特に私がよく使うのは３番目の部屋です。なぜかといわれても答えに困りますが、何となく自分が落ち着くからかもしれません。もっとも相談に来た人のほうは、この部屋に入り、ほっとしているかどうか……。でも安心して話をして下さる方は、きっと居心地が良いのでしょう。そう感じるのはどうも感覚的なものだからのようです。

さて部屋という器はいろいろ変化します。ほっとできたり、元気になったり、重苦しかったり、落ち着かなかったり……。同じ部屋のはずなのに不思議です。

適応指導教室「そだち」へ通ってくる子どもたちは、学校に自分の居場所をなくして、ここに通ってきています。その子どもたちに、学校や教室がないわけではありません。しかし、学校という空間の中に自分の居場所が感じられなくなってしまっているのです。その子どもたちも、はじめてここ「そだち」に来たときは、とても緊張感をもっていたり、居心地の悪そうな様子もみられます。しかし、ここで、スタッフと心が通い合う経験や他の子どもたちとのかかわりから、次第にその緊張もほぐれ、ある時ここに居場所を感じ、続けて通室するようになります。

一体、子どもたちにとって学校とはどんな器でしょう。そして、子どもたちにとって教室とはどんな器でしょう。

子どもたちが心で居場所を感じるのは、教室という器にではなく、そこにいる誰かと心がつながった時からではないかと思います。いくら立派な部屋があっても、人と人とのつながりが感じられない時、それは飾り物でしかありません。なぜならその中の大きな位置を占めるもの、それこそ人間の存在だからです。教室が子どもたちにとって心の居場所になっているかどうかということが実はとても大事なことなのではないでしょうか。その部屋に入って、何となく安心できたり、ほっとできるとき、それこそそこに居場所があるということなのですから……。

（國坂）

相談の基礎２

かけがえのない子どもたち

いじめ・不登校・非行や校内暴力・学級がうまく機能しにくい状況など、児童生徒の心の『揺れ』に対応するために開発的・予防的教育相談の実践と充実が望まれています。積極的に問題解決を目指す能動的な援助活動としてのそれは、全ての児童生徒を対象として、学級担任を中心とし、全ての教師が、日常の教育活動の中でかかわる日常的指導としての相談であり、そのさらなる具体化が問われています。

久しく「全ての教師がカウンセリングマインドを持つべきである」と言われていますが、この“カウンセリングマインド”とはどのような意味合いを持っているのでしょうか。國分（1990）は、この言葉を「人間関係を大事にする姿勢」ととらえ、「防衛機能を緩和させる（ふれあい）、役割をわきまえる（つきあい）の２点を念頭においた生き方がカウンセリングマインドである」と説明しています。また、渡辺（1996）は、「人と人とのかかわり合いが関係するような状況で、この言葉は『相手の内面（思いや気持ち）を大切にしそれに注目する姿勢、相手の身になり相手の視点に立って物事を見ていこうとする姿勢』を意味し、さらに、そのような姿勢をとれるようになるために必要といわれる『相手をありのままに受け入れること』を指しているようである」と述べています。したがって、教師にとってのカウンセリングマインドとは、教師が児童生徒に対して自分の都合だけで頭ごなしに指導するのではなく、「児童生徒の内面（考えや気持ち）に注目しながら指導・援助にあたろうとする教師の姿勢や心構え」を意味しているわけです。この意味において「全ての教師がカウンセリングマインドを持つべきである」と言われることは当然のことであり、疑う余地はないように思います。

日頃の教師活動の中で児童生徒と正対するとき、待った無しの対応が求められる場合が多いことを考えると、根本的には個々の教師のパーソナリティに大きなウェートがかかっているようにも感じます。いま、教師に求められているものは、児童生徒との人間的な関係を如何に作り、その関係を如何に大切にするかということでしょう。つまり、私たち教師が個々の児童生徒をどれほど大切で「かけがえのない存在」としてとらえることができるかにかかっているわけです。

専門のカウンセラーとは異なり、学校の教師だからこそできる児童生徒への援助は何か、カウンセリングマインドとともにいつも心に留めておきたいものです。（竹内）